

氏名	酒井孝裕
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	論医博第1830号
学位授与の日付	平成15年5月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	Comparison of results of coronary angioplasty for acute myocardial infarction in patients \geq 75 years of age versus patients $<$ 75 years of age (75歳以上の高齢者における急性心筋梗塞への直接冠動脈形成術：75歳未満との比較)
論文調査委員	(主査) 教授 米田正始 教授 福原俊一 教授 北 徹

論文内容の要旨

はじめに

急性心筋梗塞患者への治療の進歩にもかかわらず、高齢者は依然死亡率が高いままである。直接冠動脈形成術(PTCA)は、血栓溶解療法に適さない多くの患者群に適応拡大されている。頭蓋内出血の減少が可能なPTCAの有益性は、高齢者において、さらなる効果を与えると考えられる。そこで、75歳以上の後期高齢者へのPTCAの治療効果を評価し、この侵襲的再疎通療法の臨床的有用性について検討した。

対象および方法

対象は1994年1月～1998年12月の5年間に小倉記念病院に入院した、発症24時間以内の急性心筋梗塞患者と、梗塞発症24時間経過後も心電図上急性心筋梗塞に一致するST上昇または低下を認め、依然胸痛の持続を認める患者に対しPTCAを施行した連続1063例であった。75歳以上の261例(24.6%)を後期高齢者群とし、また75歳未満の802例(75.4%)を75歳未満群とした。院内死亡の原因を心臓死と非心臓死とに分類し、両群における院内予後について検討した。

結果

I 患者背景

後期高齢者群は、75歳未満群と比較すると、女性の頻度は有意に高率であり(48% VS 22% $p < 0.0001$)、多枝病変を有意に高率に認めた(50% VS 39%, $P < 0.01$)。

II 再疎通成功率

再疎通成功を、後期高齢者群に243例(93%)に認め、75歳未満群に762例(95%)に認めた。両群の再疎通成功は、高率に可能であった($p = NS$)。

III 院内死亡と死亡原因

全院内死亡を、後期高齢者群に22例(8.4%)に認め、75歳未満群に30例(3.7%)に認めた。後期高齢者群は有意に院内死亡が高率であった($p < 0.01$)。院内死亡の原因では、後期高齢者群に心臓死を16例(6.1%)、非心臓死を6例(2.3%)に認めた。75歳未満群にては、心臓死を25例(3.1%)、非心臓死を5例(0.6%)に認めた。後期高齢者群は、75歳未満群と比較し、心臓死($p < 0.05$)と非心臓死($p < 0.05$)が有意に高率であった。

IV 再疎通成功・不成功における院内死亡

両群において、院内死亡患者を再疎通成功と再疎通不成功とに分割して比較検討した。後期高齢者群においては、再疎通成功の際の院内死亡患者は16例(6.6%)に認め、再疎通不成功にては6例(33.3%)に認めた。75歳未満群においても、再疎通成功の際の院内死亡患者は23例(3.0%)に認め、再疎通不成功にては7例(17.5%)に認めた。再疎通成功の際の院内

死亡率は、後期高齢者群 ($p<0.0001$) と75歳未満群 ($p<0.0001$) とともに、有意に低率であった。

V再疎通成功患者における院内死亡

再疎通成功患者における院内死亡を、両群間にて比較した。さらに、その院内死亡患者を、心臓死と非心臓死とに分割した。後期高齢者群においては、再疎通成功患者243例中16例 (6.6%) に院内死亡を認めた。75歳未満群においては、再疎通成功患者762例中23例 (3.0%) に院内死亡を認めた。後期高齢者群は院内死亡率が有意に高率であった ($p<0.05$)。非心臓死においても、後期高齢者群に6例 (2.5%) に認め、75歳未満群に5例 (0.7%) に認めた。院内死亡率と同様に、後期高齢者群は非心臓死が有意に高率であった ($p<0.05$)。

しかし、心臓死においては、後期高齢者群に10例 (4.1%) に認め、75歳未満群に18例 (2.4%) に認めた。再疎通成功患者において、後期高齢者群の心臓死は、75歳未満群と有意差なく低率であった ($p=NS$)。

考察

本研究結果は、後期高齢者急性心筋梗塞患者へのPTCAが院内死亡率を効果的に減少させることを示唆した。PTCAによる再疎通療法は、年齢によらず心臓死の頻度を低下させると考えられる。血栓溶解療法に適さない後期高齢患者においては、PTCAによる再疎通療法が有用である可能性を示唆した。

論文審査の結果の要旨

直接冠動脈形成術 (PTCA) は、血栓溶解療法に適さない急性心筋梗塞患者群に適応拡大されている。

そこで、後期高齢者へのPTCAの臨床的有用性を評価するため、PTCAを施行した急性心筋梗塞連続1063例を、75歳以上の後期高齢者群 (平均80.8-4.6歳) 261例 (24.6%) と75歳未満群 (平均61.2-9.3歳) 802例 (75.4%) の2群に分け、治療効果を検討した。

後期高齢者群は、75歳未満群に比べ、女性の頻度 (48% VS 22%, $p<0.0001$)、多枝病変の頻度 (50% VS 39%, $p<0.01$)、全院内死亡率 (8.4% VS 3.7%, $p<0.01$)、心臓死亡率 (6.1% VS 3.1%, $p<0.05$)、非心臓死亡率 (2.3% VS 0.6%, $p<0.05$) が有意に高かった。再疎通成功率は、共に高率であった (93% VS 95%, $p=NS$)。各群内での比較では、院内死亡率は、再疎通成功例では再疎通不成功例に比べ、後期高齢者群 (6.6% VS 33%, $p<0.0001$) でも75歳未満群 (3.0% VS 18%, $p<0.0001$) でも、有意に低かった。再疎通成功例のみでの検討では、後期高齢者群の心臓死亡率は、75歳未満群と有意差を認めなかった。

本研究結果は、後期高齢者急性心筋梗塞患者へのPTCAが院内死亡率を効果的に減少させることを示唆した。血栓溶解療法に適さない後期高齢患者においては、PTCAによる再疎通療法は有用である可能性が示唆された。

以上の研究は、高齢者急性心筋梗塞例へのPTCAによる治療の可能性を示唆し、その適応の拡大に寄与するところが多い。従って、本論文は博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認める。なお、本学位授与申請者は、平成15年3月25日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。